

6月28日（口加だより巻頭言）

「人を喜ばせる」

口加高等学校長 狩野 博臣

去る6月16日、所用で上京するため長崎空港に行きました。七夕を控え、利用客が願い事などを書いて飾れるように空港ロビーには笹、短冊、ペンが置いてありました。カウンターまでの列に並んでふと目をやると、笹には筆跡から小学生が書いたと思われる4枚の短冊が下がっていました。それぞれこう書いてありました。「たくさんお金がほしい」、「長崎和牛がたくさん食べたい」、大きな字で「おかね」。宇宙飛行士になりたいとか、Jリーガーになりたいとか書いているかと思いきや、意外に現実的なことを書いているなと思いました。そして、もう一枚にはこう書いてありました。

「これを見た人がみんな幸せになりますように！！」

どんな子どもが書いたのだろうと、会ってみたくなりました。他の3人は「おかね」とか「長崎和牛」とか自分が欲しいものを書いてあります。もちろん短冊には自分の願い事を書くのですからそれでいいのですが、最後の子どもには自己ではなく他者が意識の中にあることに感心しました。この子どもは幸せな人生を歩いていくことでしょう。「己」の下に心をつけると「忌」。忌々（いまいま）しい。しゃくにさわるなどの意味です。自分の生き方を振り返り、反省した瞬間でした。

振り返るといえば、もう15年以上前になるでしょうか、高校の教員になって10数年経った頃です。ふと、「教員の仕事は何だろうか」と考えたことがあります。数学や英語、保健体育を教えること、部活動の指導をすること、面談をすること、成績をつけること・・・挙げればきりがありません。しかし、それは表面的なことであって、自分の仕事は詰まるところ「人を喜ばせる」ことではないかと思に至りました。この場合の「人」とは生徒です。結局、私たち教員は「先生、この数学の問題が解けました！」とか、「英語が苦手だったけど、最近、長文が読めるようになってきました！」とか、「第1志望の大学に合格しました！」とか「公務員試験に合格しました！」とか、部活動ならば「記録が伸びました！」とか・・・生徒たちを喜ばせることが私たちの仕事ではないかと思うのです。子どもたちが喜ぶということは、保護者の方々も喜んでいただけるということにつながっています。もちろん、「喜ばせる」ことは、楽をさせるとか、甘やかすということではありません。真の喜びは、努力してひと山越えた向こう側にありますので、宿題を出したり、補習をしたり、小テストや模擬試験をしたりもしますし、怠けに対しては厳しく諭すことも必要だと思えます。

生徒たちは、看護師、歯科衛生士、農業従事者、医療事務員、パティシエ、公務員など目指しているものはそれぞれです。そして、およそどんな職業であれ、その仕事の本質は「人を喜ばせる」ことではないかと思うのです。例えば、パティシエに「あなたの仕事は何ですか」と問えば、「私の仕事は洋菓子を作ることです」と答えるでしょう。しかし、洋菓子を作ることは手段であって、その本質はやはり「人を喜ばせる」ことです。「このケーキ美味しい！」と人を笑顔にしたり、至福の時間を提供することではないでしょうか。

喜ばせる対象（人）が、仕事によって、生徒であったり、患者さんやその家族であったり、お客さんであったりと、違うだけではないかと思うのです。

ある集会で、生徒たちに「将来、仕事は何をされているんですか」と聞かれたら、こう答えなさいと話をしました。

「私の仕事は、人を喜ばせることです。」

仕事の目的は、生活するためとか、生きがいのためとか、自己を磨くためとか、様々だと思いますが、私は10数年前に自分の仕事の本質は「人を喜ばせる」ことにあると思い至った時から、仕事観や教育観がぶれなくなってきたように感じています。

口加高校は「生徒たちを喜ばせることができる学校」であり続けるよう、これからも精進してまいります。